

【論文】

『テンペスト』から『インドへの道』へ

磯山 甚一

From The Tempest to A Passage to India

ISOYAMA, Jin'ichi

要旨：1611年頃に初演されたとされるシェイクスピア作『テンペスト』と、1924年に出版されたE.M.フォースターの小説『インドへの道』は、イギリスが海外へ進出して帝国を形成していく時期のちょうど初期と終期に位置する作品である。いずれも、ヨーロッパ出身の支配者とその土地に前から住んでいた人物との葛藤の物語であり、ヨーロッパを中心に世界が一体となっていく過程で生じる課題を確認することができる。ここではヨーロッパと先住民との関係を焦点にすえることで両方の作品で見えてくるものがあることを明らかにする。

キーワード：先住民、新世界、旧世界、植民地、帝国

1 プロスペローの後継者

1611年ロンドン、ホワイトホール

エリザベスの治世が終わりその遠縁あたるスコットランド王ジェームズがイングランド王を兼ねてロンドンに宮廷を構えたのが1603年であった。シェイクスピアは王宮の主の交替に伴って自分の劇団が宮内大臣一座から国王一座へと名を改めてからも、年に1～2作の芝居を劇団に提供していた。やがて、1609年頃にその劇団が新しく屋内上演用の劇場を手に入れたことで、彼は新しい趣向の芝居に可能性を見出すようになった。それがいわゆる

るロマンス劇と呼ばれる一群の戯曲である。

そのひとつ、『テンペスト』と題した芝居が、1611年の万聖節（11月1日）の夜に国王一座によってホワイトホールでジェームズ一世の御前で上演された。シェイクスピアが単独で書いたとされる最後の戯曲である。⁽¹⁾ その芝居の舞台となったのは地中海に浮かぶある島であった。さほど大きくはないらしいその島には、前のミラノ公爵プロスペローとその娘ミランダ、そしてその島の住民キャリバンがいる。12年前にプロスペローがミラノから娘を伴ってその島にやってきて以来、彼ら三人はその島にずっと一緒に暮らしていた。たまたまその島の近くをナポリ王たちが乗り組んだ船が通りかかり、嵐に巻き込まれる　そこで幕が開くという設定である。

この戯曲は作者シェイクスピアがヨーロッパ人による新世界発見と移民の新潮流に触発されて書かれたとされる。登場するのは、ヨーロッパ人の父親とその娘、そして、どうやら新世界の住民にあたる男子である。舞台は地中海であるが、ミラノという旧世界内の権力争いの物語に新世界の住民との遭遇がからまって物語が展開する。島の住民に与えられた名前キャリバン（Caliban）という固有名詞は、かつてコロンブスが新大陸の先住民に与えたカニバル（cannibal）という呼称をもとに、そのアナグラム（綴り変え）として作られたとされる。⁽²⁾ キャリバンの母親が信仰する神の名が南アメリカに由来する「セテボス」（Setebos, I.ii.375）となっているのも、作者の意図的な選択であろうと想像できる。この芝居はシェイクスピアを含めて当時の人々が新大陸の住民についてどういうイメージをもっていたか、新大陸の住民が旧世界でどう表象されたかを知る手がかりとなろう。シェイクスピアにはめずらしく、種本のない彼のオリジナルの戯曲である。

その人物たちの関係を述べると次のとおりである。プロスペローはかつてミラノ公爵であったが、実弟によってその地位を追われ、娘のミランダを伴ってその島に12年前に流れ着いた。島はイタリア半島のナポリとアフリカ大陸地中海沿岸のテュニスを結ぶ航海線上にあるようだが、その島にはその地で生まれ育ったキャリバンがすでに暮らしていた（島には固有の

『テンペスト』から『インドへの道』へ

名称が与えられない。キャリバンは最初その父と娘を喜んで迎えた。彼は娘から話し言葉を教わるなどして、次第に親子と親密になった。だがそうしているうちに、彼がその娘を凌辱しようとしたことが発覚する。父親プロスペローは怒り、結果として元からの住民キャリバンと新参者親子の仲は険悪になった。キャリバンはその騒動の後で洞窟に閉じ込められたうえに、プロスペローのもとで奴隷のように働かされた。彼は主人に反感を抱き続けて仕返しをする機会をうかがい、ついには嵐で流れ着いたヨーロッパ人たちと共謀し、プロスペローの命をねらう。だが、結局プロスペローの魔術に屈服し、その力を再確認し、奴隷のような境遇に甘んじざるを得なくなる。

1924年ロンドン、『インドへの道』

以上のように『テンペスト』の登場人物の配置は、支配するヨーロッパ人、支配される先住民という人物関係が成り立っており、その支配と服従の関係が結局再確認されて幕となる。この人物配置はずっと時代が下って20世紀初めに書かれた『インドへの道』にも共通する人物関係である。『テンペスト』が初演された17世紀初めは、イギリスのヨーロッパの外への拡大の初めの局面にあたり、イギリスの東インド会社が設立されたのがまさに世紀の変わり目の1600年であった。そしてその東インド会社はすでに1874年に解散して役目を終えていたが、20世紀に入ると、その会社が基礎を築いたイギリスのインド亜大陸への進出は頂点に達したのみならず、英帝国の版図は最大規模に達した。帝国領だけを通して世界一周ができるといわれた時期であり、作者E.M.フォスターはその頃にインドを訪れて現地を直接肌につれて経験した。『インドへの道』の物語が展開するのは、この20世紀初期の時期にあたる。

これら二つの物語における人物関係に類似の部分があるのも不思議ではない。というのも、『テンペスト』という戯曲がイギリスの海外進出の初期段階の歴史に埋め込まれているとすれば、『インドへの道』はその進出の最

終局面に嵌め込まれる形で物語が構想されたことになる。17世紀初期の戯曲に盛られた物語からは、コロンブスが先鞭をつけて進出した新しい土地とその住民に対する強い関心が感じ取れるであろう。⁽³⁾ それに対して20世紀初めの小説の物語では、西ヨーロッパの拡張と海外進出の結果生まれた「英帝国」の領土拡大が頂点に達したまさにその局面で、その巨大な組織の運営はさまざまな矛盾を生みだし、その帝国もイギリスにとって都合よくは維持できないことを暗示しているように見える。実際に、20世紀の中葉に世界中を巻き込んだ第二次世界大戦が終結すると、それらの被支配地域はつぎつぎと独立した。かくて、イギリスの拡大の初めと終りの時期に属する二つの作品を並べることで、17世紀から20世紀の間の変化に巻き込まれた人々の間でどんなことがどのように起こっていたのか、たどることになるであろう。

シェイクスピアの戯曲『テンペスト』でキャリバンの住んでいたあの島は、フォースターの『インドへの道』になると、その規模はめざましく拡大し、インド亜大陸のほぼ全体を包含した。イギリスが支配したのは、今日でいえばインド、パキスタン、バングラディッシュ、ミャンマー（当時のビルマ）を含む地域である。同国はさらに西に隣接するアフガニスタンにも侵略の野望を抱き実際に触手を伸ばした。この亜大陸に住んでいた住民は、包括してインド人と呼ばれる膨大な数の人々であった。『インドへの道』には、それらの住民の代表者とでも言うべきアジズというムスリム男性が登場する。彼は、「その大地は誰のものでもない、自分のものだという思いがした」(p.15)と述べる。ほぼ3世紀前に、『テンペスト』のキャリバンが、「この島はおれのもんだ、おふくろのシコラクスが残してくれた」(I.ii.333)と叫んだことを思い起こせば、アジズはインドのいわば先住民の一人として、キャリバンの後継者として造形されたとみなしうるであろう。

これら二つの物語には、物語展開にも類似点がある。先住民の白人でない男性と、ヨーロッパ人の白人女性に関わる事件である。一方は『テンペスト』のキャリバンによるミランダ凌辱未遂、他方は『インドへの道』の

アジズによるアデラ凌辱未遂とされる事件である。キャリバンの場合は、その事件の記憶が語られるだけであるが、その事件を契機として当事者たち三人の関係は劇的な変化を遂げたので、その後の島の住民の歴史（と言ってよければ）に決定的な影響を与えた。キャリバンはミランダ凌辱を企てたと名指しで責められても否定せず、未遂に終わったことを「あれはまったく惜しかったぜ」(I.ii.351)と残念がる。その結果として彼はプロスペローに従属する立場に追いやられた。プロスペローは口実となる機会をずっと窺っていたと言えるかもしれない。一方でアジズは、裁判にまで発展したその機会において、最後まで事件そのものがなかったことを主張し続け、裁判は結局ヨーロッパ人女性のアデラが訴えを取り下げて結末となる。事件とされたのは、彼女の幻想であったというのだ。アジズにとってこの裁判は重要な契機となり、イギリス人とインド人との関係を当事者として見る彼の視点は決定的な変貌を遂げることになる。

演出家プロスペロー、小説の語り手

このように先住民男性と白人女性が両作品に登場して類比が可能だとしたら、『テンペスト』の中心人物で魔術師のプロスペローの後継者が、『インドへの道』には誰かいるのか？と問い掛けてみていいだろう。プロスペローが『テンペスト』のなかで果たす役割を思い起こすと、彼は白人の男性で、前のミラノ公爵で、魔術師である。開幕劈頭に荒れ狂う嵐は、彼が妖精エアリアルに指示して起こしたのみならず、彼はその妖精を操って意のままに動かす力を持ち、島のいたるところに目を光らせている。自分の娘はおるか、キャリバンやその仲間に加わった者たちが企むこと、していることはすべてお見通しである。さらに『テンペスト』という芝居上演そのものが、プロスペローが魔法を用いて演出する芝居として構成されているとの解釈もできる。プロスペローが最後に魔法の杖を折ることについては、作者シェイクスピアが戯曲の創作に終止符を打つことの暗示と考えられている。

このように述べていけば、ちょうど思い当たる人物がいる、すなわち、『インドへの道』の語り手である。この語り手の特徴は、小説の伝統でいわゆる全能の（omnipotent）語り手に近い存在である。この語り手は物語の過程でどこにでも空間移動ができるし、どんな事件でも起こせるし、登場人物たちの考えること、することに注釈を加えることは言うに及ばず、さらに踏み込んでその理由まで説明する、ほとんど魔術的な全能の力をそなえることになる。時としてこの語り手は、登場人物の考えを地の文の「描出話法」でそのまま述べることもさへある。この語り手は作者フォースターに非常に近いと想定されるときも、もちろん厳密に重なることはないだろうが、ヨーロッパ人であり、白人男性であることは間違いない。彼は過去形で語っているから、すでに起きた出来事を報告する形式を採るが、出来事は事実の報告ではなく、語り手の想像力が生み出すフィクションとされている。その語りの過程では、洞窟の中で起こったことを明らかにせず読者から伏せて謎のままにしておくなど、読者を相手に駆け引きとみられる行為を行う場合もある。

この語り手の全能性は、19世紀末から20世紀初めの英国小説の伝統の中では異例である。小説のリアリティをめぐる種々の前衛的な試みがなされていた当時、リアリティに欠けるとされるかもしれないこのような語り手を生み出したのは、フォースターがあえて採用した意図的な試みであった。彼は当時の小説家たちが採用するいわゆる小説の視点の考え方にうんざりしていた。『インドへの道』の執筆に行き詰っていたころ、友人（G.L. Dickinson）に宛てた手紙に彼は次のように書いた。「私は自分の無能さ加減だけでなく、フィクション形式の退屈と常套にうんざりしています。つまり、物語の展開を登場人物の一人の内面を通じて見なければならぬ、他の人物については『たぶんそう考えた』と言わなければならない、あるいは他の人物の視点をとれるのはほんの少しの間に限る、という慣習のことです。[語り手が作中の]一人の人物の内面に入り込めるならば、すべての人物にそうしてもいいのではないのでしょうか。理由はわかります。本当

らしさが失われ、物語の創造主も単なる興行師 [showman] に墮するのでしょう。でもそのような類の変化をやらなければなりません。小説家たちのわざとらしい無知の装いにはうんざりしています」⁽⁴⁾ フォースターは、その当時の小説の主流のあり方に疑問を感じ、まさにプロスペローのような「興行師」の顔を取り戻そうとしたとみて間違いない。

シェイクスピアの『テンベスト』とフォースターの『インドへの道』は、英文学につらなる作品群のなかで、伝統的な批評の文脈では通常は結びつかない、異例の組み合わせとなるだろう。ただし、旧大陸と新大陸、帝国中枢のイギリスと植民地のインド、土地に前から住んでいた先住民がいて、そこに遅れてやって来たヨーロッパ人支配者、これらをめぐる想像力が二つの物語に共通していることは明らかである。17世紀の初めの舞台芸術の可能性を駆使して展開される劇作家の想像力から、20世紀の初めに小説というジャンルを活用しようと悪戦苦闘した言語芸術家の想像力へ、3百年を隔ててどんなことが起きたのかに注目する。

2 キャリバンからアジズへ～先住民の表象

17世紀の先住民～キャリバン⁽⁵⁾

キャリバンは「この島はおれのもんだ、おふくろのシコラスが残してくれた...もとはこれでも王様だ」(I.ii.333, 344)と叫んでその島の所有権を主張する。キャリバンに島を残した母親はシコラスという名の女性であった。その女性はアルジェ (Argier, I.ii.265) から追放され、名も無いその島に水夫たちによって運ばれて遺棄された。彼女はそのとき妊娠していたので、やがて生まれたのがキャリバンである (誰がその命名をしたかは言及がない。母親が名づけてそう呼び、息子が覚えたとするのが当然であろう)。母親シコラスは息子キャリバンを残して死ぬ。その後プロスペローが島に漂着したとき、母親の影はその島になかったが、その女性と遺児キャリバンは、その島の最初の住民であったことに疑いはない。シコラス

スが来る前の島はどうだったのかには言及がなく、無文字時代のその島の物語＝口碑は、シコラクスから始まる。⁽⁶⁾そこへプロスペローが漂着し、彼はミラノから持参した「数巻の書物」(I.ii.167)を携えていたので、島は文字をそなえた歴史時代に入る。

キャリバンは、プロスペローが暴君 (tyrant) で、「魔法を使っておれからこの島をだましとったんだ」(III.ii.40-42)と主張する。今日のわれわれはその主張を先住民の主張として正当と考えるようになった世界に生きているが、17世紀に作られた戯曲では、その主張の正当性は支持されない。幕が下りる直前にプロスペローがミラノに帰ることを言明するにいたっても、キャリバンはそのプロスペローの支配に服している。その島をこれからどうするかについては何も結論は出ないまま、不思議な言葉だけが残される。すなわち、プロスペローはキャリバンを指して、「この悪魔の化け物は私の下僕と確認する」(V.i.275-6)と。邦訳の「悪魔の化け物」は、原文ではthis thing of darknessであり、darknessが地獄 (hell) を意味するという解釈に基づく。⁽⁷⁾だが、白人 先住民を対比させるという本論の文脈で理解するならば、彼の皮膚の色を白人と対照させてdarknessと言明したと見るべきであり、「黒い肌のもの」ということになる。皮膚の色に基づく近代的人種主義の萌芽とみなしていい。⁽⁸⁾キャリバンがプロスペローにとって「私の下僕 (mine)」であるという位置づけは、プロスペローがミラノへ帰る決心を述べた後で宣言される。だとすれば、遠方のミラノに帰って公爵位を回復したプロスペローの「下僕」として、キャリバンはその島に残り続けるであろう。

先住民キャリバンがプロスペローと出会った経過はさらに詳細に語られる。プロスペローと娘ミランダがその島にやってきた当初、島の唯一の住民であったキャリバンは彼ら二人を歓迎して迎えた。当人が語るところによれば、彼は二人を連れて島の中を案内し、「清水の湧くところ、塩水のたまる所、穀物の実るところ」(I.ii.340)と、さまざまなもののありかを教え、島に闖入した父娘を歓迎した。島はどうやら採集や狩猟でキャリバン一人

が生き続けられるような、自然は豊かだが、経済的には未発達段階にあったと想定される。第二幕で述べられるとおり、「大自然はひとりでに豊かにかぎりなく五穀を実らせ、幼子のように無心に遊ぶ人々を養う」（II.i.158-60）まさにそんな島だったのだろう。⁽⁹⁾

そのようなキャリバンに対し、ミランダは「心の思いを人に伝える言葉を教えてやった」（I.ii.359-60）と述べる。ミランダの「言葉」とは英語のことである。彼女によれば、キャリバンは当初「自分で何を言っているかもわからず、獣のようにただわめき散らすだけ」（I.ii.357-9）だったという。だが考えてみよう、ミランダにキャリバンがわめき散らすだけに聞こえたのは、キャリバンが言語を持たなかったか、キャリバンの言葉をミランダが理解できなかったか、どちらかである。一方のキャリバンは、父娘に出会った当初に自分の意志で島の中を案内するだけの知的能力を身につけていたのだし、父娘が来る前に死んだ母親の魔術や母親の信仰する神セテボスについて理解を示して語るができる。さらに、キャリバンは自分の母親の姿を覚えている（「おれが見た女と言やあ／おふくろのシコラクスとあの娘だけだ」（III.ii.98-9））。他方のミランダは、満3歳にならないうちに父と一緒にこの島に来たので（I.ii.40-1）、自分の周囲に侍女たちが4～5人いたような気はするが（I.ii.46-7）、母は覚えていない（「この方〔ファエディナンド〕は私が目にした〔父とキャリバンに続く〕三番目の人」（I.ii.447-8）、「私は女の人を一人も知りません」 i.48-9）。キャリバンは成長後に母を覚えているとすれば、母親が死んだ頃には言語活動も可能なそれ相当の年齢であったことになる。

だとすれば、母親のシコラクスが死ぬ以前、そしてプロスペローとミランダがやって来る以前、キャリバンはその母親から自分の名前を含めて何らかの言語を学習していたのである。⁽¹⁰⁾ 母から学んだ文字通り「母語」であるところの、ホモサピエンスであれば必ず習得するはずの何らかの言語を。それが英語以外の言語であったため、ミランダには理解不能な獣のようなわめき声に聞こえたにすぎない。一方でミランダが学んだ言語は母親

の教える母語ではなく、父親の言葉である英語、いわば「父語」であったことは、プロスペロー自身が自分をミランダに「おまえの師」(*thy schoolmaster, I.ii.172*)だと認めている。これに関連して、1幕 ii 場の353～364行に置かれたミランダの台詞が男のような激しい口調であるため彼女にふさわしくないとみなされ、プロスペローの台詞としているテキストもあるが、ミランダの学んだ英語がプロスペローの教えた「父語」であることを考慮すれば、ミランダがそのような支配者然とした父親の口調に近い英語を話すことも納得できるであろう。この島の言語環境の歴史は、英語しか話さないミランダとプロスペローの一方的な説明だけを鵜呑みにして語るわけにはいかない。

キャリバンが二人にそのような親切な振る舞いをしていた頃には、島の所有権をめぐる、あるいは相互の力関係をめぐって、プロスペローとの間にトラブルが発生していた形跡はない。この島の新旧の住民三人が一緒に暮らし始めて以後キャリバンによる例のミランダ凌辱未遂事件までは、プロスペローとキャリバンの間に支配と従属の関係は発生せず、キャリバンも客人をもてなす純真な主人役を務めていた。二人の間には権力関係のようなものも介在しておらず、社会的関係の生まれていない、牧歌的な世界であった。

そのようにして始まったキャリバンとプロスペローの関係において、ミランダ凌辱未遂事件が大きな転機となった。プロスペローは「大事な娘を辱めようとしたから追い出したのだ」(*I.ii.348-50*)と述べる。そうして現在にいたって二人の間は主人と奴隷という関係が定着し、キャリバンはプロスペローの暴力的な魔術が痙攣を起こしたり、からだをつねったりすることを承知しているので、その力に完全に屈服している。彼の意識では、ミランダに英語を教えてもらった結果は「悪口雑言は覚えた」(*I.ii.366*)ことだという。彼にとって英語とは、プロスペローの行為に対する反応としてしか意識されず、主人への反抗心を伝える言葉としてのみ意味を持つということである。現状では、悪口雑言を並べる彼の言語活動はプロスペロ

一の怒りを引き起こし、それがさらに反抗的な悪口雑言をキャリバンから引き起こすという、完全な悪循環に陥っており、キャリバンはそのたびに暴力的に屈服させられる結果に終わる。

ただしキャリバンはもう一度、そして最後の反抗を企てる。彼は、難破した船から逃れて島に上陸した下級船員たちと意気投合し、島にはプロスペローという人物が支配者として君臨しているが、もしそいつを倒すならば島は自分たちのものになるだろう、その娘も手に入れられる、と船員たちをそそのかして共謀する。だがその企てはすべてを知るプロスペローによって見事に裏をかかれ、失敗に終わる。芝居の幕が下りる時点で、キャリバンは相手の力を再確認したところである。彼が最後に言う台詞は、「うん、そうするよ。これからは利口に (wise) なり、かわいがってもらえるようにするよ...」(V.i.294-5) というものである。

20世紀の先住民～アジズ

外部からやってきた者に対する先住民の最初の反応として、『テンペスト』のキャリバンと『インドへの道』のアジズは似た行動をする。⁽¹¹⁾ キャリバンがミランダとプロスペロー父娘に会った当初親切にも島の要所を案内したのと同様に、アジズも苦心惨憺して準備を整え、イギリス人の女性新参者たちを伴いピクニックに出かける。両者の関係は最初の時点ではどうやら、新しく自分の土地にやってきた客をもてなす主人という様子であった。ただし、キャリバンの場合は未だに相互の関係が無垢のまま、汚されない状態、いわば原初の平和が保たれている時期があったが、⁽¹²⁾ 一方『インドへの道』の先住民にあたるアジズは、『テンペスト』で最後に「利口に (wise, V.i.294)」などと言って退場したあと、再び表舞台に出現したキャリバンだと言っていいだろう。アジズの場合、インド亜大陸を舞台とする彼の物語の初めから、イギリス人によるインド支配は厳然と既定の事実として彼の前にある。彼は生まれたときからイギリス人の支配下で生活し、イギリス人の支配を当然とする意識があり、現在はキャリバンのように「悪

口雑言」を並べながらも、すでに「利口に」なっているので、イギリス人支配の官僚組織の中でその権力機構の手足として働いている。

20世紀初めのインドは、『テンペスト』がロンドンで上演されていた頃に東インド会社が生まれて以来の約3百年という長いイギリスとの関係があり、そして支配と従属の前史があった。インド亜大陸の先住民と後から入ってきたイギリス人との間には、長い確執の歴史があったことは歴史から明らかである。その過程では、総じて侵略者の側に力の優位があり続けてきた。だからこそイギリス人は20世紀初めの現在においてインドで支配者として振舞っているのだが、それに対しては、キャリバンがプロスペローに対して反抗を企てたように、支配者側から見れば反乱、先住民の側から言えば抗争または戦争があった。

『インドへの道』で頻繁に言及されるのが、歴史上の「大反乱」の記憶である。その記憶はトラウマ（心的外傷）としてイギリス人、インド人たちの心によみがえる。キャリバンが最後に反乱に失敗してプロスペローの魔法の威力に怖れをなして「利口に(wise)」なりおとなしくなったように、インド人たちは「大反乱」失敗後のトラウマに妨げられて行動が起こせない。1857年から59年にかけてインド亜大陸で起こったその大規模な反乱は、イギリスのインド支配を根底から揺るがした大規模な先住民の武装蜂起であった。大きな犠牲を払って鎮圧に成功したイギリス人たちにとっても、その記憶は大きなトラウマとなって残り続けたといわれる。20世紀の初めに書かれた『インドへの道』にも、半世紀前のその反乱に何度も言及があり、物語に暗い影を落としている。

その出来事は歴史上「大反乱 (the Great Mutiny)」または単に「反乱 (the Mutiny)」と名づけられる。大であろうが小であろうが、「反乱」という名称を用いる前提として、何か「中心」を想定している。『テンペスト』の例でいえば、キャリバンがプロスペローの命をねらうとき、プロスペローは島内ですでに圧倒的な力を掌握している。その時のキャリバンは、自分の行為を支配者に対する「反乱」と認識するわけではなく、せいぜい私的な

怨念を晴らす「悪事 (mischief, IV.i.217)」、 「殺害 (murder, IV.i.232)」と述べるにすぎない。だがプロスペローは同じキャリバンの行為を「あの汚い陰謀 (that foul conspiracy, IV.i.139)」と位置づける。「陰謀 (conspiracy)」とは、島に漂着してから実弟のアントーニオとナポリ王の弟セバスチャンが企んだ兄ナポリ王殺しの企みを指して彼の僕の妖精工アリアルが用いた語彙と同じである (open-eye d conspiracy, II.i.296)。 その同じ語彙を用いることによってプロスペローは、キャリバンの「悪事」である行為をヨーロッパ的言説のなかに横滑りさせて取り込み、キャリバンを首謀者とする陰謀を鎮圧する物語を自分で演出して生み出すことになる。それによってプロスペローは、自分が島の「中心」だとする立場をより一層堅固なものに見える結果をもたらすのである。

キャリバンがプロスペローのいう陰謀の挫折を通じて「利口に」なったあとの姿で登場すると、すなわちアジズなのであろう。自分の企みに失敗後のキャリバン＝アジズは、プロスペロー＝ヨーロッパに屈服した過去の記憶があるため、もはや反乱を起こすことはできないし、考えてもみない。プロスペローの魔術とは、キャリバンをつねったり関節を痛めつけたり、暴力的な力にほかならない。イギリス人たちはその魔術＝武力を笠に着て、インド亜大陸において最高権力を持つ地位を確保し中心を占有している。「利口な」アジズはヨーロッパの力を認め、習い覚えた英語で「悪口雑言」を並べながらも、その統治機構のなかの中間層として一介の役人として雇用されて働く。それは、インド人たちがあの「大反乱」を経てヨーロッパの圧倒的な武力を認め、同時に西欧的価値が普遍的であり、インドの人々もそれを受け入れざるを得ないと承認している姿である。

ところが物語の最後でアジズは、藩王国 (native state) といわれる辺境の地域で医師の仕事に従事することにして、イギリス人たちから逃れるように身を隠して彼らとの接触を絶つ。アデラ凌辱未遂事件の裁判がアデラの訴えとりさげであっけなく終わったあとの彼の転身である。その辺境の地でアジズのイギリス人に対する悪口雑言も一層高じる。彼は「イギリス

人をやつつける」(p.281-2)と叫ぶが、しかしそれでも、「利口な」彼はイギリス人から逃れて接触を避けて過ごすしかない。もしもアジズがインドで今おかれたような境遇を抜け出そうとするのであれば、ヨーロッパという中心の魔術に対して暴力を用いて対抗しようとした過去のような「反乱」ではなく、その中心に抗するための、暴力とは別の原理が必要であることを暗示しているであろう。プロスペローの魔術に抗するには、魔術ではもはや太刀打ちできない、すなわち、ヨーロッパの武力に対抗するには、武力では太刀打ちできない。アジズにはその新しい方法はまだ見出せない。

だが、プロスペロー自身が最後に魔術を捨てる意図を明らかにしているのは、そんな暴力的な魔術の力は、一時的には相手を屈服しておけるだろうが、将来には有効性を失うということではないか。いつまでもキャリバンに痙攣させたりこむら返りを起こしたり、力で押さえつけてはおけない。それは、ヨーロッパという存在を魔術＝武力とは別の原理に依拠して相対化し、必ずしもヨーロッパが中心ではないとする原理が将来出現することの暗示であろう。

そう考えると、20世紀になったインド亜大陸には、屈従したキャリバンにはなかった意識が生まれていることも確かである。すなわち、宗教共同体の意識として。アジズの場合、その亜大陸はあまりにも広大であり、小さな島を個人で自分のものだと主張するようなわけにはいかない。彼はその大地を自分が所有しているかのような思いを抱くだけであるが、彼のその思いは、自分がムスリムであることと密接に結びついている。初めに、ヒンドゥー教徒たちがその大地を支配した。やがてムスリム皇帝たちの支配があり、その後にイギリス人たちがその大地の支配権を奪った。だが、ムスリムの前後の支配者がどんな人々であれ、その大地は自分のもののようにアジズには思われた。ここにある意識は、キャリバンと異なる。アジズには自分がムスリム宗教共同体に属している意識があり、それは島に一人で暮らしていたキャリバンにはなかった。

その宗教共同体の意識を前提にしてアジズは、「インドは必ずひとつのネ

ーションになることだろう、どんな外国人も入れない、ムスリム、ヒンドゥー、シークがきっとひとつになるだろう」(p.281)と叫ぶ。そうしてできあがるインドという「ネーション (nation)」は、19世紀に世界各地で生まれた数々のネーションのひとつになり、「ガテマラ」や「ベルギー」と「姉妹関係 (sisterhood)」を結ぶだろう、そう彼は考える (p.281)。ここには名称は出ていないが、「イギリス」もひとつのネーションであり、ネーションとしては、インドもイギリスも対等な関係になるだろう。

そのようなネーションは、アジズによれば、彼らが単に反抗の経験を経てキャリバンのように「利口に (wise)」(V.i,294) なるだけではなく、「もっと利口に (wiser)」(p.281) なることにより、作り出すことが可能になるだろう。キャリバンもアジズも、自分の意思決定をするために他者の言語 = 英語の「利口な (wise)」を用いなければならないが、それでもアジズはキャリバンの経験をふまえて自分で自分の行動を決めるようになっている。「いままではあなたがたのせいにしていましたが、今ではわれわれが悪いのだとわかりました。それだけ利口に (wiser) になったのですね」(p.281) と。そしてもう一度ヨーロッパで戦争が始まったら、そのときがチャンスだと彼は予言する。アジズのその予言は、ヨーロッパで戦争が起こることについては確かに的中した。未曾有の第二次世界大戦として。だが、インドがひとつのネーションになるだろうという予言は、歴史が証明するとおり、見事にはずれた。ヒンドゥーと、ムスリムと、シークはひとつになろうとせず、分離主義の地獄に陥ったのである。それら宗教共同体はそれぞれがネーションになろうとする道を選んだのだ。

3 なぜ物語を語るのか～語り手プロスペローと『インドへの道』の語り手

プロスペロー

『テンベスト』には幕が下りたあとにエピローグ (Epilogue) が付され、

「プロスペローがのべる (Spoken by Prospero)」と指示がある。エピローグがここで「皆様 (you)」と呼びかけているのはもちろんそのときの公演を見るために劇場へ足を運んだ観客である。ジェームズ一世の宮廷で行われた御前公演の場合ならば、芝居を楽しんだ王と宮廷人たちである。シェイクスピアの演劇はビジネスとして成り立たねばならない商業演劇であったから、それらの人々は入場料を払って劇場に足を運んでいただろうし、御前公演であれば、その公演に見合う金銭が王室から劇団に下賜された。エピローグはそういうわけで、いわゆる顧客として彼の芝居を支えた人々に向けて語っている。

このエピローグの場面の直前にはプロスペローの「さあ、こちらへ」という台詞があり、「一同退場」のト書きがある。その退場の後に一瞬間舞台は空になると想定されるだろう。そしてそのエピローグへと続くが、誰かの登場を指示するト書きはない。プロスペローが一旦退場し、直後にその扮装のまま舞台に引き返すのであろうか。だとすれば、その人物はプロスペローの扮装をしているが、すでに魔術を使うことはできないと自分で述べるから(「私の魔法は消えました」)、その人物はプロスペローであって、しかも芝居の中のプロスペローと同じではない。さらに、このエピローグが登場する直前に舞台を島に見立てた仮想空間での物語は終わり、プロスペローを演じてきた役者が役者に戻って語ることになる。プロスペロー役の生身の役者である。さらにもうひとつ、魔術とは劇作のことと解釈してプロスペローを作者シェイクスピアに擬する観点からは、物語の進行に終止符を打った作者が役者の口を借りて観客に語りかけているとも言える。

以上の仕組みを芝居の始まりから整理してみよう。冒頭の嵐の場面続きプロスペローがミランダとともに登場するとき、プロスペロー役の役者は『テンペスト』のプロスペローとしての演技を始める。と同時にそのプロスペローは、自分で生み出す物語の中の登場人物ともなる。開幕劈頭の嵐を鎮めた後で彼が魔術師のシンボルであるマントをmy Art (I.ii.25)として言及する場面があり、ここにプロスペローを作者に擬する考えを適用す

れば、魔術＝劇作術として暗示される。そこでマントを脱いだことは、芝居の演出を一時中断することを意味する。そしてプロスペローは過去の物語を語り始め、自分がミラノ公爵であったところから説き明かし、自分自身の物語をミランダに語り聞かせる。彼が魔術を用いて嵐を起こしたのは、目的の船を島に導き寄せ、乗船している人物たちを巻き込んで物語を作動させるためであったことが判明する。すなわち、自分がミラノ公爵として正当な権利があることを過去の歴史物語として叙述し、その後の公爵位回復の物語の演出へとつなげる。幕が下りる直前には、自分をミラノから追い出した実の弟が悔い改めたと認めて許しを与え、ミラノ公国が自分に返還されることの正当性を周囲の人物ならびに観客に対して主張する。観客がプロスペローのミラノ公爵位回復は当然だと考えるならば、彼の演出は成功であったといえるだろう。

プロスペローはそのねらった演出通りの物語の終りが見えてきたとき、自分は魔術を捨てるつもりであると述べる。魔術とはこの物語を成り立たせる必須のものである。嵐はその魔術によって引き起こされ、物語の発端になる。プロスペローが魔術を捨てることはしたがって、芝居の演出に終止符を打つことにもなる。

このように、エピローグのテキストは三重の意味で『テンペスト』という芝居の外に位置する。魔法を捨てたプロスペロー、プロスペロー役の役者、作者を代弁する役者として。それら三者の立場すべてが一致して述べることは、そのエピローグの言葉を用いれば、観客（およびジェームズ一世）を喜ばす（to please）という目的であった。その目的のためにこそ、作者は『テンペスト』という芝居を生み出し、役者はプロスペロー役を演じ、プロスペローは魔術を用いた、と。屋内劇場の観客やジェームズ一世と宮廷人たちはその喜びを得たならば、その時間を過ごした対価として入場料を払うこと、国庫から下賜金を与えることに満足し、エピローグの要請に応じて拍手を送り、やがて帰途につくことになる。

『インドへの道』の語り手

では『インドへの道』の語り手には、プロスペローにみられるような重層性をわれわれは認めることができるだろうか。そのためには、『インドへの道』という小説テキストが1924年に成立した直後から、作者フォスターが様々な形でそのテキスト本体に別の文字テキストを時の経過とともに付け加えていったことに注目することで解明の糸口があるだろう。

この小説がペンギンブックス社から1924年に最初に出版されたときには、タイトルページの裏のページに「シェド・ロス・マスードと、われわれの十七年間の友情にささぐ」という献辞が掲載された。マスードはムスリムのインド人で、作者フォスターの同性愛の恋人であり、作中に登場するムスリム、アジズのモデルになったとされる人物である。さらに、物語の末尾には*Weybridge, 1924*という地名と年号が記載されており、これはフォスターがかつてマスードに初めて出会ったときに住んでいたと同時に、⁽¹³⁾ この小説を執筆し終わった1924年に住居を構えていた、ロンドン郊外の地名とその年号である。⁽¹⁴⁾ この素っ気無い追加文字は、シェイクスピアのエピローグとは違って、その小説を購入した読者に楽しんでいただいたかどうかと問いかけてはいない。作者は20世紀初めの小説の執筆をエリザベス朝の演劇のようなビジネスモデルでは考えていなかったのであろう。

その後1942年になって『インドへの道』がEveryman & Library版に収められて出版されたとき、今度は冒頭に「初版をマスードにささげたが、この版では、デウス国王ツコジ・ラオ・プアール殿下にもささげたい」と記載された。デウス国王とは、フォスターが1921年に二度目のインド旅行をしたときに訪問し、秘書としての地位を与えられて滞在した藩王国の王であった。そのEveryman & Library版にはさらに、Peter Burraという批評家による長文のIntroductionが付されたほか、E.M.F.とイニシャルだけが記されたAUTHOR'S NOTEが付け加えられた。Everyman & Library版はその後も版を重ね、1957年にはE. M. Forster, 1957として名前と年号を付し、何もタイトルのない1ページだけの文章が冒頭に付け加えられた。さらに1968年版の

AUTHOR S NOTEでは、「自分が生きていうちに出される最後の版になるはず」とみずから述べるとともに、当初付されていたマスードらへの献辞はすべて消去された。そのほか、その版を出版するにあたり、物語の中に多数あるはずの事実関係の誤りをあえて修正しなかったこと、1968年の時点でアナクロニズム（時代錯誤）になった語彙があるが、とくに注意を促すこともしなかったことを述べる。

別稿で確認したとおり、18世紀初期に出版されたロビンソン・クルーソーの物語では、語り手が経験した事実を本人がありのままに報告するという虚構がそのテキストの存在の基盤となり、テキストもまたタイトルページや宣伝文句などにおいて、その虚構があたかも事実であるかのようにして振舞う。実はそれがデフォーという作者の書いたテキストであることは、テキスト外の実事から後になって判明したのである。それに対してフォースターの『インドへの道』では、最初の出版の際にもすでに冒頭に「献辞」が付され、インドでの出来事を描写して終わる物語の末尾には、*Weybridge, 1924*という、物語内容とはまったく関係のない、作者の住居の地名と執筆終了時を暗示する年号が付された。献辞に付されたそれらのインド人の名前、そして物語の末尾に付された地名は、物語内容との関連は一切なく、作者であるフォースターを介してのみ物語とつながる。

換言すれば、*Weybridge, 1924*は、ささやかなエピローグとなっているとみなせる。シェイクスピアがプロスペロー役の役者の口を借りて明示的に観客に向かって述べたエピローグを、フォースターは極めて暗示的な形で、単に地名と年号だけに凝縮して他には何も述べないですませた。フォースターは『インドへの道』を出版したあとでは、その作品に比肩しうような長編小説は結局書くことなく生涯を終わったことから、このささやかなエピローグは、シェイクスピアがプロスペロー役の役者の口を借りて述べたとちょうど同じように、結果的に作者の絶筆宣言に類する役割をはたした。彼が1942年のEveryman & Library版でAUTHOR S NOTESを付け加えたことは、作品テキストと別に生身の作者がいることをさらに明確に示した。

そのAUTHOR S NOTESで彼は、物語の舞台となるインドのチャンドラボアという地名も、すべての登場人物も、いずれも想像上のものであるとわざわざ述べるとともに、物語で登場する建物や場面を彼に暗示した典拠（sources）として、インド国内に実在する地名や建造物などに言及して説明した。

さらに1942年のEveryman & Library版に付された1ページの文章では、批評家Peter BurraによるIntroduction（1934年に執筆されたもの）が冒頭に付されることに言及し、この小説を執筆する際の主たる目的を探りたいならば、その回答はそのIntroductionの文中に見出されるはずだと述べ、自分が執筆するに際しては、政治的にも、社会的にも、何か目的はなかったと付け加える。シェイクスピアは『テンペスト』を生み出した目的が観客を喜ばすことであると明確に述べるが、フォースターは「主たる目的」を、「～ではなかった」と否定の言葉で述べるだけで、ではいったい何が主たる目的であるか、自分の言葉では伝えようとしなない。

その目的にあたるものをフォースターの指示どおりそのPeter Burraの序論から探るとすれば、それは「彼の書物は美しい。それらはなによりもまず芸術作品である」(p.xvi)という文に集約できるであろう。Burraは言う、「フォースター氏の物語は匠の生み出したもっともすぐれた技である」、「『インドへの道』は三つの楽章をもつ交響曲のように構想されている」、「フォースター氏は音楽家であった」⁽¹⁵⁾と。そしてフォースターみずから述べた文章を引用する、「小説は物語を語る…私[フォースター]はむしろ、それが何か別ものであったらどんなによかっただろうと願う。メロディーとか、真実の認識とかであって、この先祖がえりの形式ではないものであったらと」(p.xii)。批評家Burraの論点を本論に即して言えばこうなるだろう、すなわち、フォースターが生み出したのはいわば芝居の『テンペスト』のようなものである、フォースターは作者シェイクスピアがプロスペローの姿を借りて述べたArtすなわち「魔術」を使う魔術師である、と。⁽¹⁶⁾ フォースター自身が用いた「興行師(showman)」とは、そのような

存在のことに違いない。

しかし、『テンペスト』のエピローグと『インドへの道』の*Weybridge, 1924*は大きく異なる。前者は観客を喜ばす目的を明確に述べ、その目的に沿わなかった場合でも、どうか慈悲をもって拍手を送って欲しいと請い願う。なぜなら、もしもその芝居が観客に受け入れられず観客の足が遠のけば、自分の所属する劇団の衰退が待っているからである。フォスターの場合は、『インドへの道』という小説が読者に受け入れられるかどうかについて作者の思いはどこにあったのか、この短いエピローグからは伝わらない。シェイクスピアにとって最重要課題であった観客獲得という目的にあたるのは、小説家フォスターでは読者を獲得すること、その本を購入してもらうことだったはずだ。しかし、この小説家はみずからを「興行師」に譬えながらも、みずから生計をたてるために収入を得る必要はなかったことから、⁽¹⁷⁾ そういうビジネスに関する話題は念頭になかったのであろう。

語りの行為と権力の正統性

プロスペローが自分で演出する芝居の中で自分の過去を語り、自分が正統のミラノ公爵であり、その島の支配者であることを正当化していることを確認した。それに対してキャリバンが島は自分のものだ、プロスペローが自分から騙しとったと主張する。この主張の対立により、島はいったい誰に帰属すべきかという、島の所有権、あるいは島における権力の正統性が問題とされることになる。キャリバン以後のヨーロッパと植民地との間で絶えず課題となったことである。例えばマックス・ウェーバーによる権力の正統性の根拠に関する理論であげられるのは、(1) 合理性、(2) 伝統、(3) カリスマ、という三つの型である。⁽¹⁸⁾ 合理性とは被支配者側の合意ということであるが、17世紀のキャリバンには合意など問題外であった。伝統とは、主として権力者の血統の連続性に基づくが、プロスペローは島でそれを主張することはできない。彼自身がその島に遅れてやってきたからである。最後のカリスマという点でも、キャリバンはプロスペローの暴

力に屈服してしぶしぶ従っているだけであるから、帰依するとか畏怖するわけではなく、島の正当なる支配の根拠にはなりがたい。

プロスペローの支配はこのようにウェーバーの権力の正統性のどれにも当てはまらないが、その言い分の核心にあるのは、彼の魔術の暴力的な力に加えて、キャリバンは悪魔が魔女シコラスに生ませた子だという主張がある。キャリバンは自分の父親がだれか母親から知らされていないらしく、プロスペローのそういう言明に反論はしない。しかしプロスペローのその決め付けた言い方は、キャリバンの血統と来歴をおとしめ、島を力で「横取り」した自分の略奪行為を正当化するために悪魔を登場させて捏造した過去の物語であると解釈すべきだろう。この島における先住民の記憶の抹殺と略奪者による歴史の捏造であり、いわゆる「伝統の創造」にあたる。父親である悪魔とは、キリスト教徒からみた異教徒を暗示するであろうし、魔女とは、ヨーロッパ内で排除され差別を受けた者を暗示する。プロスペローは、そんな血統が怪しげなキャリバンは島の所有権を主張する正当性をもたない、だから島に対する自分の権利があると主張していることになる。それは結局のところ、彼がキャリバンを圧倒する暴力的魔術(=武力)を駆使できることに依拠する。⁽¹⁹⁾

血統ということ言えば、島の所有権だけでなく、ミラノ公爵位についてもプロスペロー自身に弱みがないわけではない。彼はミラノ公爵の地位を受け継いだはずの自分の父親と母親を自分の公爵位回復の物語に登場させず、ミランダが自分にとって存在すべき祖先として「おばあ様 (my grandmother, I.ii.119)」と述べるのみである。しかも、彼は娘のミランダに言う、「おまえの母は貞節の鑑であった、その母がおまえはおれの娘だと言った」(I.ii.55-6)と。この回りくどい言い方は何を暗示するのか。ミランダの母はプロスペローの妻ではないのだろうか？ その女性が妻だとすれば、どこにいるのか、今どうなってしまったのか、彼は黙して語ろうとしない。娘のミランダが自分の娘であるかどうか、それはその女性が言ったからだ、としか言えない。前にも見たとおり娘のミランダも、母の顔を

覚えていない(「この方〔ファーディナンド〕は私が目にした三番目の人」
(I.ii.447-8)、「私は女の人を一人も知りません」(I.i.48-9)。

キャリバンとアジズではひとつ決定的に違う部分がある。プロスペローは、その島の中にいてキャリバンが怨みの矛先を向けるべき対象であり、物理的にも視覚的にも確認できる対象だった。ところがアジズの場合には、プロスペローにあたる生身の人物は彼の目前には存在しない。1857年の「大反乱」の衝撃を受けてイギリスはインドを直接支配することに決定し、イギリス女王がインド皇帝を兼ねた。インド統治において意志決定権を持つ中心的主体はインド亜大陸にはどこにも存在せず、はるかかなたのロンドンに移っていた(プロスペローがミラノへ帰った後の状況に他ならない)。インド亜大陸の大地に残されたのは、あたかもエアリアルのように、ロンドンで行われる意志決定を忠実に実行するために「インド文官職 (Indian Civil Service)」として働く社会的エリートのイギリス人およびインド人ばかりであった。彼らは自分で意志決定をして行動するわけではない。エアリアルが瞬時に空間を移動し、こちらにいるかと思えばあちらに顔を出してプロスペローの命令を実行したように、インド文官職の役人たちはインド亜大陸に偏在している。アジズにしてみれば、どこを攻撃していいのか、標的を絞ることなどまるで不可能である。

『テンペスト』にも暗示はあった。プロスペローは最後に魔法の杖を折り、魔法の衣を脱ぎ、ミラノに帰って墓に入る準備をしようと言っているが、キャリバンは島に残される。プロスペローはそのキャリバンを指さして、「私の下僕であると確認する (I / Acknowledge mine. V.i.275-6)」と宣言する。この「私の下僕 (mine)」という言い方は、その前に彼がナポリの貴族たちに向かって、その臣下の者たちを「ご存知のはずだが、あなたの召使いであり (know and own)」と述べた続きの言葉づかいがある。そのownは、「所有する、支配する」という意味であり、彼はまもなくミラノに帰る予定であるから、自分がミラノに帰った後も継続してキャリバンを所有し、遠隔地から支配を及ぼすことを意味するだろう。「下僕」として島に残った

キャリバンは、ミラノにいる主人から発せられる命令にしたがって行動しなければならぬだろう。ミラノのプロスペローが将来墓に入った後でも、ナポリに嫁いだ娘ミランダとその夫ファーディナンドが、ミラノ、ナポリ、島の後継支配者となり、島にも支配権を及ぼすだろう。

ここに新しく生まれているのは、この島と、ミラノと、ナポリ、すべてを含めて見ることのできる視野である。『インドへの道』でいえば、イギリス本土と、インド亜大陸を両方ともに包含する視野ということになる。その視野をそなえることで、自分が今ヨーロッパで所有する土地のみならず、遠隔地にある土地までも支配を及ぼそうとする。このような支配の形式は、プロスペローが娘ミランダを伴って島に移り住んで島を現地で直接支配したのとは異なる。その際のプロスペローは、その島に漂着して移り住んでからも、ミラノで公爵であったときと同じように振る舞った。つまり、ミラノ公国の支配原理をその島にいわば「移植」したのであった。⁽²⁰⁾ そのプロスペローが、島を離れることを決意したあとも、島の住民キャリバンは「自分のもの (mine)」であると確認する (acknowledge)。自分がミラノに帰ってからも、在地のミラノと合わせてその島も自分のものにしておく、遠隔地支配を及ぼすと意志を表明したのである。⁽²¹⁾ かくして、中核としてのミラノ (=ヨーロッパ) と、周縁としての島 (=植民地) という、近代的な意味の植民地の成立を告げている。⁽²²⁾

このようにしてプロスペローがミラノに帰ったあと、新しい近代的形式の遠隔地の領土支配が始まった。その支配形式が究極にまで到達した有様こそ、まさに『インドへの道』のインド亜大陸である。あくまでも意志決定権は遠隔地の中核にある。イギリス本国の政府である。周縁としてのインド亜大陸に置かれた総督府は、本国の「インド省」の下に位置づけられたので、中核ロンドンでの決定を受けて指示を実行する下位部局にすぎなくなった。そのようなときに一人アジズがたとえもう一度「反乱」を起こそうとしても、そもそも不可能であることは明らかである。キャリバンがプロスペローの命を狙ったようにはいかない。アジズは藩王国に一時撤退

するしか方法はなかった。彼が目標とすべき中心は、遠く隔たったロンドンにしか存在しないのだから。

4 不在の存在

不在の女性たち キャリバンの母、ミランダの母、クラリベル

『テンペスト』でキャリバンの母シコラクスは舞台上に最後まで姿は見せず、ただキャリバンの記憶とプロスペローの物語中の人物として言及される。プロスペローはその女性に直接会ったことはなく、エアリアルとキャリバンから伝え聞いただけが、「鬼ばばあ」(wicked dam, I.ii.322)と呼び、「魔女」(witch, I.ii.263)だと決め付ける。一方のキャリバンはその女性を「母シコラクス(Sycorax my mother)」と呼び、その母が息子である自分に島を残してくれたのに、プロスペローが横取りしたのだと主張する。キャリバンが語る島の起源の物語は、身籠った女性が小さな島にたどり着いて赤子を産み落とすところから始まる無文字時代の物語である。

一方でプロスペローは娘ミランダの母である無名の女性に一度だけ言及する。彼は「お前の母は貞節の鑑であった、その母がおまえはおれの娘だと言った」と語る。その女性は死んでしまったのかどうか、名前は何なのか、明かされない。⁽²³⁾ 娘は侍女が4~5人いたことは記憶にあるが、それは母でないことだけは承知している。プロスペローは自分がミラノ公爵としての正統な地位を自分の弟によって略取されたとしているが、一方でキャリバンから島を奪った行為は自分が奪う立場になって同じことを繰り返したにすぎないことを認識しない。島はプロスペローが持ち込んだ書物と文字により新しく歴史時代が始まる。島の歴史物語としてみれば、プロスペローは略奪により島で新しい支配権を獲得する人物だが、女性とではなく、娘とともにその物語を始める。

『テンペスト』にはもうひとり名前が言及されるだけで不在のヨーロッパ人女性がいる。クラリベルである。その女性はナポリ王アロンゾーの娘

であり、地中海を船に乗ってアフリカへテュニス王と結婚するため父親や今のミラノ公爵、廷臣たちと出かけた。ナポリ王たちはその婚礼の帰途に嵐に巻き込まれ、プロスペローの島に漂着したのであった。ナポリ王の弟セバステアンによれば、その婚礼は「自分の娘をヨーロッパに嫁がせずアフリカに捨て」(II.i.120-21)たようなもので、そしてその「美しい娘も、嫁ぎたくない気持と親には従わねばという気持に引き裂かれていた」(II.i.125-6)。テュニスはアフリカ大陸の地中海に面する都市であり、その支配者はヨーロッパの王族と婚姻関係を結び女性を受け渡しする間柄にあったということである。クラリベルは結婚に際して自分の意志は貫かなかったが、ナポリ王国とテュニス王国を結ぶ物語に参入してそこに名前を刻し、血統を交えることになった。

アジズの妻

『インドへの道』でも人々の記憶の中に生き続ける無名の女性としてアジズの最初の妻への言及がある。その女性は、インド亜大陸の先住民の女性で、誰からも固有名で呼ばれず、自分自身の言葉で語ることはなく、もっぱら他者によって語られる対象である。ヨーロッパ人である語り手は全能の語り手を装うにもかかわらず、その女性について直接語ることはなくアジズの目を通してのみ語る。さらに、あのシコラクスはプロスペローによって三重の意味で 先住民、魔女、女性として 中心から排除されたが、アジズの妻は魔女と決め付けられない以外は、先住民の女性として『インドへの道』の語り手の語りから排除されており、わずかに夫であるアジズの記憶の中のみ生きている。

アジズはその妻とのあいだに二人の息子と一人の娘があると述べる。子どもたちは妻の母親つまり祖母とムソリー(p.243)という土地で暮らす一方、アジズはイギリス人支配下の英帝国の統治を司る官僚組織のなかでチャンドラポアに医師として単身で赴任している。そうして得る自分の給料はすべて子どもたちの養育費として送っているので、自分はといえば、「下

級役人 (p.7) のように暮らし、男やもめの住居はみすばらしい。彼は遠縁の伯母にあたるハミドゥラという名の女性からいつ再婚するのかと問われ、「一度でたくさんです」(p.6) と答えるが、後に藩王国で侍医になってから再婚する (p.256) 『インドへの道』にムスリム女性で固有名を持って登場するのはこの伯母だけで、チャンドラポアにいるアジズの親族のうちただ一人の女性である。

アジズはまた体調を崩してベッドに臥していたときに、フィールディングというイギリス人の訪問を受け自分の亡き妻の写真を見せる。フィールディングによれば、写真に写った「その女性は、夫と自分の願望を込めて外の世界に顔を向けていた」(p.99) アジズは妻のようなムスリム女性がパーダー (purdah) の陰に隠れて暮らす慣習を是認するが、妻がもし仮に生きていたら、フィールディングは自分の兄弟だと妻に告げて会ってもらうだろうと言う。アジズはフィールディングが自分の兄弟 (brother) のような特別な人であると好意を示したらしい。⁽²⁴⁾ アジズの最初の妻やハミドゥラ伯母のようなムスリム女性たちは、パーダーの背後に自分たちの暮らしがある。アジズはその「パーダーの慣習を是認します (I believe in the purdah)」(p.98) と述べ、女性がパーダーという帳 (とばり) の奥に隠れて隔離された生活を送ることにムスリムであることの確認を行う。ただし、裁判が終わり藩王国の侍医に転進した後の物語の最後では、その言を翻し正反対にパーダー反対を唱えることになる。「パーダーはなくならねばならぬ」(p.256)。

英語でいうpurdahは、ウルドゥー語とペルシャ語でベールやカーテンを意味する語に由来する。それがイギリスのインド進出とともに英語の語彙に借用され、オックスフォード英語辞典によれば、1800年に “A purdew, or skreen, of a yellow kind of gauze...” として薄織物の遮蔽物を指して用いられ、それが英語の語彙に入った最初であった。やがてイギリスのインド支配が確立する19世紀の半ば頃になり、その語は具体的なものを指し示すほかに、「一定年齢以上の女性が、一定の範囲の親族以外の男性の前に出るの

を禁じる慣習」⁽²⁵⁾として、ムスリム女性を男性から隔離する制度そのものを意味するようになった。

『インドへの道』におけるパーダーの向こう側の世界は、語り手のみならずムスリムであるアジズによっても言語による表象が不可能であることを確認してみよう。パーダーはそもそもその向こう側を遮断し隔離するとすれば、イギリス人のようにpurdahを隔てている人々には、定義上その向こう側は見えない。隠して見せないためにこそ、そのパーダーがある。もしも見えることが判明したら、パーダーではなくなり、パーダーとしての機能を果たさない。アジズがフィールドディングに述べるように、ムスリムが「兄弟 (brother)」とみなすイギリス人ならば、あるいはパーダーの奥のムスリム女性たちに会えるのかもしれない。ちょうど、アジズが甥として縁戚関係にある伯母のハミドゥラ夫人に会ったように。しかしアジズはパーダーの存在を是認しているので、その内側を表象することは、是認するという自分の信念に違反する。イギリス人が「兄弟」となることは、その同じ信念を共有することであろう。そうでなければ、「兄弟」とは言えない。

かくて、『インドへの道』では、アジズと語り手にとってパーダーの向こう側が言語による表象は不可能とする言説構造が成立する。パーダーの奥の女性たちは、イギリス人からはそもそも「目に見えない (invisible)」と言われる。たとえば次のような言い方、「彼女ら〔たくさんのムスリム女性たち〕が死んでも、彼女たちは実際のところ目に見えない (invisible) のだから、たいした違いはないだろう。彼女たちはすでに死んでいるかのようには思われた」(p.186) と。この言い方でいけば、アジズの妻は亡くなっているのだが、もしも仮に生きていたとしても、イギリス人たちにとって違いはない。これらの「見えない (invisible)」をめぐる言明が出現するのは、イギリス人たちが不安に駆られて自分の思いを口々に表明するという場面である。アジズの裁判の中断をきっかけに暴動が起きそうなその町で、不穏な様子を伝える情報がつぎつぎと入り、緊迫した状況に興奮した彼らの差し迫った反応を表す言葉である。⁽²⁶⁾

邦訳はこの「見えない (invisible) ので」を文脈から意味を汲んで、「パーダーの奥で暮らしていたので」と言い換える (邦訳p.352)。この邦訳を手がかりに考察を進めるならば、「パーダーの奥にいるから」と、「見えないから」では、読み手に違いをもたらす。邦訳で「見えないから」と言わずに、「パーダーの奥にいるから」と述べる限りにおいて、その向こう側における生活が暗示される。それは実際に見えないのかもしれないが、こちら側に位置する人間が意図的に見ないのかもしれないし、そもそもこちら側がその向こう側を見ないように、意図的に拒んでいるのかもしれない。つまり、こちら側の視覚 (=つまり語り手) に原因があるかもしれない。この語り手は、ヨーロッパ人に関連する場面では全能の振舞いをするわけだから、パーダーの先が見えないのは、自分の視覚をさえぎる遮蔽物を自分で意図的に設定し、あえて見ないでいると言わざるをえない。すなわち、語り手はアジズの「兄弟」として振舞っている。他方で、イギリス人たちの思いを描写する文章では、ムスリム女性たちの姿が「見えない」ことを根拠にして、まるで「死んでいるかのように思われた」と言わせている。かくて、パーダーの反対側にいるムスリム女性たちに対する、英語を用いる人たちの思い込みに満ちた言明に照明をあてることになる。⁽²⁷⁾

このようにpurdahをめぐるムスリム女性が全能に近い語り手の語りからも排除される事態が生じる。その第一の原因はもちろん語り手がアジズの「兄弟」として振舞うことに起因するが、この語り手が英語を用いて言語表現することも考慮に入れるべきであろう。例えば、アジズがイギリス人と英語を用いて会話をする場面において、彼がかつての自分の妻を誤って表象する事態にいたる。すなわち、イギリス人と話をしているうちに、彼は死んだ妻を「生きていることに」する (p.131)。上で確認したように、その女性はいずれにせよパーダーの奥にいるのだから、生きていようが死んでいようがイギリス人には変わりはない。アジズは嘘をついたという意識はなく、生きていた方がよりartistic (芸術的) であると感じたからだという (p.131)。すなわち、英語を媒体とした表象界においては、自分の妻

は生きていることにすることがふさわしいとアジズは感じる。英語という言葉が生み出すその表象界は、パーダーの向こう側とは非常に異なったものでありうる。生と死のように、正反対でさえありうる。

イギリス人の語り手が英語を用いることは当然として、アジズが外来の支配者の言語を用いるのは、キャリバンがミランダから英語を習ったことに比較できる。キャリバンは英語を習得しても、自分を表象するために役立たないと感じた。彼にとって英語は、ただ悪口雑言を並べるときだけが、自分を表現する媒体だと意識できると。一方のミランダとプロスペロー（さらにロビンソン・クルーソー）らの支配者は、人間が言語を習得することと英語を習得することが同じことだと認識している。『インドへの道』には英語を教えるミランダにあたる人物は登場しないが、20世紀初めのインド亜大陸には、住民に英語を教えて人材を育成する機関が存在した。⁽²⁸⁾ アジズら男性は英語を習得しヨーロッパの普遍的な文化を身につける過程にいる。一方でパーダーの向こう側に「見えない」まま潜んでいる女性たちは、英語を学ばず、従って言語も持たず、自分で自分を表象できない。さらには、英語で自分を誤って表象されたとしても、その事態を認識することさえ不可能である。

ヨーロッパ人の女性

『テンペスト』で名前のあるヨーロッパ人女性は最初にミランダの母がいるが、ただ一度言及されるだけである、「おまえの母は貞節の鑑であった」(I.i.56-7)。プロスペローはなぜかそれが自分の妻だとは言わない。娘ミランダはその島でキャリバンに言葉、すなわち英語を教える役目を負わされており、その点でヨーロッパと島の関係において、ヨーロッパを代表する存在である。彼女はナポリ王の息子ファーディナンドに引き合わされて父親の計画どおりに「感染して (infected, III.i.31)」結婚を決意する(プロスペローは邦訳にある「恋に感染した」とは言わず、「感染した」とのみ言う)。さらに、ナポリ王の娘クラリベルがアフリカのテュニスへと嫁いだ

ことが話題となるが、その女性自身は舞台上に登場しない。ナポリ王はその娘をテュニスでの婚礼の席へ送り届けたあと、娘は死んだも同然だと述懐する。ただし、自分が娘に命じて結婚させたのだが。

これらの女性たちはいずれも、王国の支配層の次世代をつくる、再生産を担う存在として登場する。ミランダの母はミラノ大公の正当なる後継者としてプロスペローの娘ミランダを生み、その娘がファーディナンドと結婚すれば、ミラノ公国とナポリ王国の統合に役割を果たすであろう。ナポリ王の娘クラリベルは、テュニスへ嫁ぐことで、おそらく両王国の政治的な結びつきを血縁関係として作り出すであろう。彼女らは、王国や公国の間を結びつける役目を果たすと同時に、次世代を再生産することでそれらの王国や公国の過去から未来への連続性を保証する。彼女らはヨーロッパの貴族世界（テュニスも地中海が結びつけるヨーロッパ圏内とみなしうる世界）において、貴族階層の血統のつなぎ役として行動している。

ミランダは母親を覚えておらず、父親プロスペローとキャリバンについて出会った「三番目の人」であるファーディナンドの姿を見て「感染」し、彼との将来の性的関係を結婚として父親に認知されることを望む。彼女は過去にキャリバンが自分に示した性行動を、自分を凌辱する試みとみなして拒んだ。キャリバンは島を「キャリバンっ子だらけに」(I.ii.352-3)してやったのに、というが、ミランダはキャリバンの子孫を残すつもりはなかった。かくてミランダの存在は、ファーディナンドの属する旧世界とキャリバンの属する新世界を、異性愛を焦点にした感情のレベルにおいて区別するための媒介となる。親の決めた結婚をしたクラリベルとの違いは明白で、ミランダは自分の目で見て、そして自分でファーディナンドを自分で結婚対象に選んだことになっており、プロスペローの魔術もその決心は左右できないとされている。

だが、彼女がファーディナンドを選んだ理由は、彼がミランダの「感染」を引き起こすべき固有の性質（ミランダを「感染」させる性的魅力）をそなえるからだとするのは、プロスペローの計略に沿ってその出来事を見る

ことになる。もしもファーディナンドが魅力的に見えるとすれば、それはプロスペローの演出がよくできているからなのだ。その感染はいかようにも演出可能であり、ミランダがファーディナンドを見て感染するのは、キャリバンの拒否を始まりとする過去の記憶があるからである。キャリバンの行動がきっかけで性を意識した彼女が、時が経過すると、ファーディナンドを別の登場人物として自分の選択を意味づける物語を自分で作れるようになっていく。その物語でキャリバンの肌が浅黒かった (this thing of darkness, V.i.275) のはミランダの場合は単に偶然に過ぎなかったが、その事実は肌の色に基づく人種主義の萌芽となった。やがて『インドへの道』の20世紀初期にいたって、イギリス人女性はアジズを含む肌の浅黒いインド人への性的拒絶を表明する。この点でアデラはミランダの後継者として、皮膚の色にもとづく人種主義がいかにヨーロッパ人に内面化されたかを明らかにするものであろう。インドに滞在するイギリス人男性が言う、「膚の黒い人種 (the darker races) は、膚の白い人種に肉体的に惹かれる、しかしその逆はありえない」(p.189) と。ミランダがファーディナンドを含むヨーロッパ人たちの大勢の姿を発見し、「なんてすばらしい！ りっぱな人たちがこんなにおおぜい！ 人間がこうも美しいとは！ ああ、すばらしい新世界だわ、こういう人たちがいるとは！」 (V.i.181-4) と叫ぶ。それもプロスペローの演出による効果であることは明らかであろう。ヨーロッパという本来の旧世界が、キャリバンの世界と対照させて演出される結果として「すばらしい新世界」に見えるという、逆転の仕掛けが含まれるのである。

『インドへの道』に登場するイギリス人の女性たちは、それぞれが固有の名前をもち、活動的である。「イギリスは男女同権」(p.50) であり、「女性が解放された国」(p.269) とされる。アジズの伯母以外に表立った女性の登場人物がなく、しかも「見えない」存在とまで言われるインド人女性との対照の構図は明らかであるが、すでに確認したとおり、パーダーを是認する信念を語り手が共有するとすれば、そういうイギリス人女性たちへの批判的なまなざしの存在も明らかであろう。それらイギリス人女性の中心

心には、ロニーと結婚するかどうかを決めるためイギリスからインドにやってきましたアデラ、そのアデラと同行してきたロニーの母ムア夫人がいる。

英帝国が形成される過程、または帝国が形成された結果として、イギリスからインドやその他の地域へ向かう女性の移動が起こった。「こちらへ出かけてくる女の数が増えてきたので、本国風の生活も年々やりやすくなってきていた」(p.51)といわれ、『インドへの道』の物語が展開する20世紀の初めには、イギリス人の女性たちが家族をつくるためにインドへ移動した。「この有名な半島には一億七千万のインド人がいます」(p.211)とあるとおり、イギリスが支配したアメリカ大陸やオーストラリア、ニュージーランドなどの他の大陸や島に比べると、インド亜大陸は相対的に人口稠密な土地であった。この亜大陸にビジネスやキリスト教宣教活動などで移り住んだイギリス人たちの全体数は数十万人規模と言われ、そのうち英帝国の統治組織に属した行政官は「四千人弱」という極小の数であったとされる。⁽²⁹⁾

ヨーロッパ人女性が移り住むようになって、男たちの滞在も一過性でなく家族を伴う持続的滞在となり、彼らは長期的な計画のもとで移り住んだ。それでも、『インドへの道』に登場するイギリス人女性たちが何かの仕事に従事して働く様子はない。北米大陸に移住したヨーロッパ人たちが、女性も含めてフロンティアの地で自然を相手に労働に従事したイメージで伝えられるのに比べ、『インドへの道』が伝えるインド亜大陸のイギリス人女性たちは労働することなく、膨大な数の住民を擁した土地に支配層として入り込んでいる。彼女たちは統治を行う男たちと結婚し、私生活に関わり再生産に従事する。アデラが結婚するかもしれないと考えた男性はその都市で治安判事(City Magistrate)の職にあった。イギリス人の男たちの官職名からは、その統治行為の様子が窺える。例えばcollector(収税吏)が「地方長官」であり、植民地統治において税の取立てが最も重要であったと考えられるから、その役目を表す職位が地域を統括する立場の長官にあたるのは納得できる。階級社会のイギリス国内にいた頃には貴族に属さなかった

人々が、インド文官職（ICS）として現地に職を得た途端に、イギリス国内における少数の貴族階層に比較できるような地位を獲得したのである。膨大な数のインド住民を支配する、極めて少数の異民族の集団として。アデラはロニーと結婚すれば、テュニスに嫁いだクラリベルのように、その貴族的集団の一員になったかもしれない。しかしアデラは結局結婚しないことにする。英帝国の宝石といわれた富の宝庫インド亜大陸で、女性が自分の結婚の物語を生み出すことができない事態になっている。英帝国はもはや維持できないことを暗示しているのであろう。

注

『テンペスト』および『インドへの道』のテキストは、それぞれ、The Arden edition of the works of William Shakespeare, *The Tempest*, edited by Frank Kermode（Methuen & Co. Ltd, 1969）、E. M. Forster, *A Passage to India*, Introduction by Beter Burra, notes by The Author（Everyman's Library, 1968）を用いて、台詞の行と小説のページを示す場合はこれらの版を用いた。邦訳は、小田島雄志訳『テンペスト』（白水Uブックス、1983年）、および瀬尾裕訳『インドへの道』（ちくま文庫、1994年）を参照させていただき、論述の文脈に応じて改変させていただいた。

- 1) E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, Vol. IVに掲載された、COURT CALENDARの1611年の項には、‘ Nov. ?. King’s (*Tempest*) ’の記述があり、COURT PAYMENTSの1611-12年には、‘ Hallomas nyght was presented att Whithall before ye Kinges Matie a play called the Tempest. ’の記述がある。
- 2) ヴォーン & ヴォーン 『キャリバン文化史』（青土社、1999年）pp.60-66に詳しい。
- 3) 1609年に北アメリカに向けて航行していた植民者たちが北大西洋のパーミューダ諸島で遭難した。『テンペスト』I幕 場229行には「嵐のたえないパーミューダ島 (the still-vex’d Bermoothes)」とエアリアル台詞がある。The Bermuda PamphletsについてはFrank KermodeのIntroductionを参照した。フランスの哲学者モンテーニュの「人食い人種について」は、「世界の名著19」『モンテーニュ エッセー』（中央公論社、1967年）第 巻第31章。

『テンペスト』から『インドへの道』へ

- 4) この手紙はPenguin Books版に付されたOliver Stallybrassによる序論に引用されている。Editor's Introduction to E. M. Forster, *A Passage to India*, (Penguin Books, 1989), pp.15-6.
- 5) 「先住民」という観念自体が比較的新しい考え方であり、ある土地に生まれ育った人々はその人々の独自の文化を育んできたのであって、その文化自体を尊重しなければならないという考えは、20世紀後半になってから国際間で受け入れるべきとの合意がやっと定着してきたにすぎない。シェイクスピア時代には「先住民の権利」という考え方を当てはめるのは無理であろう。しかしそれでも、17世紀の時代の中に閉じ込められていたはずであるにもかかわらず、シェイクスピアの想像力はカリバンの主張を通じ植民地主義を経過した今日においてやっと当然視されるようになった先住民の心情を巧みに表現している。ところが、現実世界の歴史ではカリバンの主張は政治的に受け入れられるまでに20世紀前半ばを俟たねばならない。帝国主義の宗主国においてはヨーロッパ中心主義にもとづく帝国意識は20世紀後半になっても払拭されなかった。たとえば1957年になって、アーデン版『テンペスト』の編集者Frank Kermodeでさえも、カリバンはNatureを表しており、それはプロスペローの表すArtと対比される、と述べている。(The Arden edition of the works of William Shakespeare, *The Tempest*, edited by Frank Kermode. pp. xxiv-xxv.) 一人の人間が地球上のどこに生まれようと、人間のnatureは必然的にヨーロッパ文明の生み出した普遍的なArtを身につけるはずだというヨーロッパ中心主義の考え方が当然視されている。次のような「進化主義的人類学」に対する批判がそのままあてはまるであろう：「進化主義的な人類学は、欧米の価値観や世界観つまり文化を人類に普遍的にあてはまる単一の基準として惜定し、その基準に従って欧米近代社会を頂点にさまざまな人間社会を序列化してきた。この進化主義的な人類学の観点からは、欧米近代社会の文化からみて異質に見える非欧米社会の差異は、単なる錯誤や人間の本性の欠落とみなされ、それら社会の劣等性の証であるとされてきた。そして、あらゆる人間の社会は、いずれは人類の普遍的な価値観に基づく欧米近代社会に進化するのであって、現在みられるさまざまな社会は、その進化の途上にあるとされたのである。このよう

に自文化中心主義的な普遍主義に基づいた進化主義が人種主義や民族差別の温床となり、欧米近代社会による非欧米社会の植民地主義的な支配を正当化する考え方であったことはいうまでもないだろう。」本多俊和・大村敬一・葛野浩昭『文化人類学研究』(放送大学教育振興会、2005年)、p. 31.

- 6) エアリアルも島にいたことは確かであるが、これは妖精であって人間ではないので島の口碑として考慮するわけにはいかないであろう。
- 7) 例えばAlexander Schmidt, *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*はこの解釈を採用する。
- 8) 『インドへの道』では、インド人たちのその浅黒い肌の特徴を述べてイギリス人たちが人種主義的発言を連発する。
- 9) 1492年にコロンブスが最初に島に到着した頃、その島の先住民は狩猟、採集経済の段階であったとされている。
- 10) Stephen Orgellは、母シコラクスは息子キャリバンに言語を教える前に死んだと判断している (New Casebooks, *The Tempest*, (Macmillan Press LTD) p.20)。コロンブス以後16世紀後半にいたっても新大陸の住民の言語について、ヨーロッパ人たちが、ことに知識人たちが新世界のインディオが言語をもたないという誤った前提で発言していた(スティーヴン・グリーンブラット『悪口を習う』p.28-9)。18世紀にいたってロビンソン・クルーソーの物語においても、彼は島で出会ったカリブ族の青年に言葉を教えるとき、「話すことを教えた」とだけ述べるが、それは英語を話すことを教えたという意味である。ロビンソン・クルーソーにとって、言語を教えるとはすなわち英語を教えることであり、その背後には、英語を話せなければ言語を持たないと同じという前提がある。
- 11) アジズを「先住民」と呼ぶことは、今日の文化人類学上の先住民の定義とかなり合致しているとみなせるであろう。「先住共同体、もしくは先住民族は、侵略され、植民地化される以前に自分の生活領域において歴史的連続性を有し、その生活領域で現在優勢である主流社会と異なる独自性をもった集団の子孫であり、現在、社会の中で被支配的な地位にある。先祖伝来の領域間においてエスニック・アイデンティティを自分の文化様式、社会制度および法制度に従って維持し、発

『テンベスト』から『インドへの道』へ

展させ、将来の世代に伝えることを決意している」。上掲『文化人類学研究』p.12に引用されている、ホセ・マルティネス・コーポーによる定義。『インドへの道』が描く頃のインド亜大陸の場合は、先住民側が少数派でなく、支配者層が圧倒的な少数派であることが著しい特色である。

- 12) コロンブスが航海日誌で記述するサンサルバドル島の住民を思い起こさせる。シェイクスピアはコロンブスを読んでいたのであろうか？
- 13) Editor's Introduction to E. M. Forster, *A Passage to India*, (Penguin Books, 1979), p.7.
- 14) 瀬尾裕氏の解説、p.542より。
- 15) 1968年に出版されたEveryman's Library版より。
- 16) Burraが『インドへの道』を交響曲に譬えているのは興味深い。ヨーロッパ発のクラシック音楽が、ヨーロッパの帝国主義的拡張と歩調を合わせて世界に広まったという指摘は事実そのとおりであろう。
- 17) 実際のところ彼は小説が売れても売れなくても生活には困らなかったようだ。「彼が大学に入れたのも、これまた大伯母さんのMarianne Thorntonのお蔭だった。彼女はEdwardが8歳の時に死んだが、莫大な遺産を残し、お気に入りの彼には8000ポンドをくれた。これが彼の「生涯の経済的な救い」となり、奨学金つきの入学試験には落第したが、自費で入学することができた」。小池滋「注釈者解説」p.7.E. M. Forster, *Aspects of the Novel*, 英潮社ペンギンブックス、1973年
- 18) マックス・ウェーバー（濱島朗訳）『権力と支配』（みすず書房、1954年）p.8.
- 19) コロンブスは漂着した島をサンサルバドル島と名づけ、神の名において所有権をスペイン王に帰した。次の世紀になると、ロビンソン・クルーソーが流れ着いた無人の島を自分のものだと主張することになるだろう。
- 20) これはヨーロッパ中世に行われた植民地拡大の方法であった。ロバート・バートレット『ヨーロッパの形成』（法政大学出版局、2003年）p.468-69.
- 21) 上掲の邦訳『テンベスト』でプロスペローの台詞（This thing of darkness I / Acknowledge mine.）は、「この悪魔の化け物めは / 残念ながら私の下僕だ」と訳されているが、プロスペローは「残念ながら」認めるのではなく、キャリバンをその島に残したままミラノに帰り、遠隔地から支配を続ける権利を確認する、とい

- う意味と理解するべきであろう。近代的な植民地主義が出現しつつある様子である。もちろん、『インドへの道』のインド亜大陸はその究極の姿である。
- 22) イギリスはアイルランドにおいて植民地経営の経験があった。ヨーロッパの他の地域も同様である。『ヨーロッパの形成』p.479を参照。「ヨーロッパのカトリック社会が一四九二年以前にすでに植民地事業に深い経験を有していたことは疑いを容れない。彼らは新しい領土に入植することに含まれる問題や将来性に精通しており、非常に異なる文化を持つ人々と接触することで起こる問題にすでに直面した経験があった。」
- 23) Stephen Orgelが述べるように、その女性は『テンペスト』のなかで、不在によりかえって強い印象を与える。New Casebooks, *The Tempest*, (Macmillan Press, LTD) p.15-19.
- 24) 『インドへの道』のアジズとフィールディングは、作者フォースターとマスードの関係を暗示させると思われる。
- 25) 佐藤正哲 / 中里成章 / 水島司 『ムガル帝国から英領インドへ』(中央公論社 世界の歴史14 1998年) p.370
- 26) 作者フォースターがEveryman's Library版に付したAUTHOR'S NOTEにおいてこの作品に事実に反する記述がとりわけ多くあると述べたのは、このinvisibleという語が用いられた文章を含む第XXIV章であった。作者がどの記述について事実に反すると述べているのかは不明である。
- 27) 日本語訳には、パーダーの奥への配慮が窺われるのではないか。
- 28) インドに設立された女性教育の学校の名は象徴的な「ミランダ・ハウス(Miranda House)」であったという。上掲New Casebooks, *Tempest*, p.149
- 29) 数字は時代によって異なるが、インド亜大陸の人口が3億を擁するとされた頃の数字でイギリス人行政官の数が4千人弱である。浜渦哲雄 『世界最強の商社』(日本経済評論社, 2001年) p.151.